



地学団体研究会編 伊藤 博 監修

新地学教育講座 気象 I, II

東海大学出版会, 1976, 150頁, 153頁, 各 1,600円

最近、気候変動や環境の諸問題とも関連して、気象学の性格づけが改めて問われはじめている。研究面での進展と社会的要請の拡大は、必然的に気象に携わる人口の増加を求め、それは気象教育の重要性につながってくる。“天気”の本年巻頭言で岸保理事長が“気象教育と普及”について述べていることは、正にこの間の事情を裏づけるものといえよう。

今般、新地学教育講座の一環として標記のテキストが上梓されたことは、この意味においてタイムリーな企画といえる。

本書の位置づけは、高等学校地学のやや進んだ参考書、大学教養程度の一般気象学の教科書・副読本である。既存のテキストとの対比から見れば、気象学総論（正野）や気象学概論（山本）の系列に属し、それらよりやや平易な説明を心がけて書かれている。

第I巻の内容は、1. 大気と気象、2. 雲の生成と降水のしくみ、3. 季節と大気の運動、4. 高気圧低気圧と天気、5. 大気中におけるエネルギー循環と大気の運動、の各章から成り、第II巻では、1. 台風、2. 大気の局地的運動、3. 日本の天気、4. 天気予報、5. 気候変動、6. 気象観測と観測データの使い方、の題目からわかるとおり、やや細分化した各論を取扱っている。

複数の著者（菊池幸雄、中山 章、荒川正一、河村武、斎藤 実の5氏）による分担執筆のため、内容に多少の重複が見られるが、全体として現在の気象学の要点

を、up to date な問題まで含めかなり良くカバーしていると言える。オーソドックスな構成に加えて随所にかこみで挿入されている“オゾン”、“スモッグ”、“ジェット気流と航空機事故”、“火星大気”、“天気予報今昔”、“気象衛星”などの新聞記事的トピックスも面白く、鮮明な雲写真・衛星写真とともに、教科書にあり勝ちな無味乾燥さを救い、気象現象に対する読者の素朴な興味を惹起させる手助けとなっている。

記述は初心者にも理解できるよう“難しい数式を避け平易な言葉で書く”ことを旨とし、図表を多用するなど苦心の跡が見られる。この試みは、大むね成功しているが、その反面、たとえばコロオリ効果や温度風の説明など、かえって煩雑になっているところも散見される。やはり、それぞれの内容に応じた最適の記述方法を採用することが、気象学の多様な性格を認識させる上からも得策であろう。

細部にわたる難点を指摘すれば：地衡風の誤った説明（天気23巻4号、高橋正吾氏の論文参照）、中緯度傾圧波の影にすぎない“間接子午面循環”の不要な強調、接地層風速分布をベキ法則のみで示していること（ただし第6章データ解析のところでは対数法則の図が使われている）、などが誤解を招く。言葉使いでは albedo を“アルベド”と書いていること、また切離高気圧を常にブロッキング高気圧と同義に用いていること、などがいささか気になる。雲の名前（記号）も、たとえば As が Altostratus の略であることを示す親切さが欲しい。

難点を挙げた最後に一言。両巻合計で約300頁のペーパーバックの定価が3,200円というのは初等教科書としてはいかにも不適當である。苟も教育出版に携わるものとしてはそこまでの配慮が必要であろう。

ともあれ、これからの気象教育の重要さに鑑み、本書のごとき正統的な教科書の出版をよろこびたい。広範な活用を望みたいものである。

（廣田 勇）